

野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅱ

村越 信子

(平成11年9月30日受理)

A Popular Belief in Field Ⅱ

Nobuko MURAKOSHI

(Received on September 30, 1999)

はじめに

古代より「道」は、民族が互に行き交い、その生産物を交換し、商業と通行の担い手になっていた。また、「道」は、同時に征服と占領の手段でもあり、軍事行動が展開した場所でもあった。

ドイツは、ヨーロッパ大陸のほぼ中央に位置しているため、東西南北から圧力や干渉を受け、古くからこの「道」を通して、周辺の文化の影響を受け激しい、変化に富んだ歴史を作り上げてきた。

この大きな役割を果たしてきた「道」の辺りに、十字路に、分岐に、峠道に、橋の袂に人々がさまざまな事柄を祈願して安置したと思われる“ビルトシュトック”(Bildstock)といわれる様々な建造物を目にする。

東京家政大学研究紀要第39集において「野辺の民間信仰・路傍の神々」と題し、路傍に置かれている信仰の対象物として、わが国では「道祖神」「石地蔵」、オーストリア国内にあるビルトシュトックと呼ばれる建造物に焦点を当て比較しながら民間信仰について論を進めた。

その後、特にビルトシュトックについての概念や起源その目的など、歴史や宗教の要因を踏まえ、ビルトシュトックが存在する意義の具体化に努めた。今回は、ビルトシュトックに焦点を当てドイツ中東部から南部・アルプス地方に現存しているビルトシュトックについて調査を行い、ビルトシュトックがどのような基盤の上に建造されるようになり、どのように民間信仰の対象物となったのか、さらに、設置されている箇所・集中している地域・その形式などビルトシュトックの歴史について「野辺の民間信仰・路傍の神々Ⅱ」として取り纏めた。

I. ビルトシュトック・その概念と起源

ビルトシュトックは野外に、とりわけ「道」のそばに築かれた宗教的な記念碑である。それはたいてい壁面のくぼみや頂部に宗教的彫刻や絵画が施されていて、高さが6mにおよぶものもある。

古代ヨーロッパ大陸においては、ライン河、ドナウ河それにいくつかのアルプスの峠道などをギリシャ人、ローマ人、ゲルマン人がしばしば移動していたが、おのずとそれぞれの民族で、道についての考え方は違っていたであろう。ヨーロッパにおいては、古くから神の存在は常に山上にあったから、古代の人々の生活も神に近くて神祀にふさわしく、また政治の場にもなりえた小高い丘陵地帯への道造った。ギリシャ人やローマ人にとって、その人々の移動のための道は神聖なものであり、その道のそばに墓を建ててもらうことが大変名誉であった。ギリシャ人は道を神聖視していたから、十字路にテセウスと道の神のアポロンのために祭壇を造った。この同じ十字路がゲルマン人にとっては、呪われた場所であった。絞首された罪人がぶらさがってカラスに突つかれているのも十字路なら、無数の伝説で悪魔が人間を誘惑しに近づくといわれるのも、この十字路、自殺者を葬る場所も十字路であった。道は古くから人々の往来があったので、それらの人々にとっては、病人のための祈祷の場所でもあった。

信仰と迷信とに取り囲まれたこの十字路に、多種多様の願いや目的により、ビルトシュトックが建てられたのである。そして今日に至っても、なお建造されつづけ、信仰の対象物となっている。このビルトシュトックといわれる信仰の対象物は、最も古いものは宗教的記念碑と考えられる。例えば、Hochkreuzen(高い十字架)

Hoheitskreuzen（崇高な十字架）Hagelkreuzen（^{ツアレ}霰の十字架）Wetterkreuzen（天俱の十字架）Friedsaulen（平和の記念柱）Totenleuchten（墓地の灯明台）などである。1)

ビルトシュトックの出現は、13～14世紀頃と立証されている。「石製の十字架(Steinkreuzen)」と密接な関係がある。おそらくビルトシュトックは、石製の十字架から思想的・宗教的に発展したものといえるであろう。石製の十字架と同様に、ビルトシュトックもまた、殺人への償いやある災難の追憶記念のため、いろいろな祈願を遂行するために設置されたのである。

15～16世紀になると、石製の十字架とビルトシュトックは、互いにかかわりあい、吸収され一体となって、現存のものへの移行期となっている。

今日でも石製の十字架とビルトシュトックの中間期の形式のものや移行期のものなど、もろもろの段階の姿が見受けられる。

II. ビルトシュトックの建造の歴史と目的

ビルトシュトックに製作年代が刻まれていたり、ビルトシュトックが描かれている絵画やイコン画・銅版画、

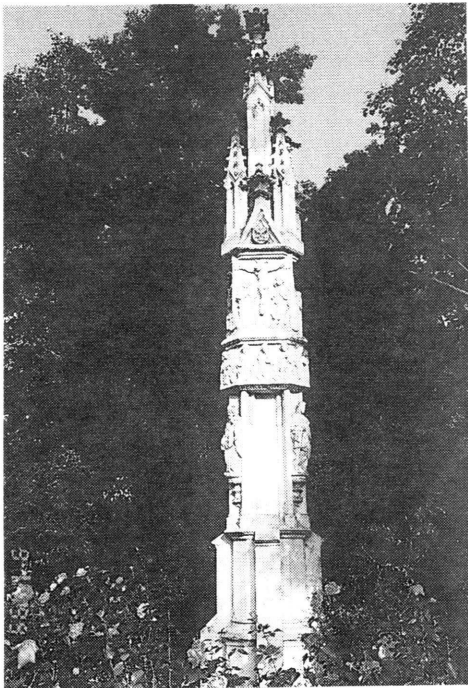


写真1 レーゲンスブルク「説教の十字架」石柱型

その他現存している記念柱より、ビルトシュトックは13～14世紀頃の殺人者の石製の十字架までさかのぼることができる。

ボン郊外のフリースドルフ(Friesdorf)にある1349年以前の「高い十字架」、レーゲンスブルクにある「説教の十字架」は14世紀のものである[写真1]。多くのビルトシュトックは、死をもたらした災難への記憶を、その場所に留めるために建造された殉難者記念碑が目的を果たした。その他のビルトシュトックは、宗教的意義の表現として、また信仰のしるしとして、そしてキリスト崇拝のしるしとして、特にキリストの磔刑(Gekreuzigten)のしるしとして、聖なるもののしるしとして、肉体と貧しき靈魂の結びつきのしるしとして存在しているのである。その他、聖地巡礼を身近に感じたり、畑や村落の境界を確かめるために、また五穀豊饒を祈願するためである。さらに、キリストの受難の光景を順次に示す十字架の道を14留に描く、クロイツヴェーグと呼んでいる、ビルトシュトックもある。

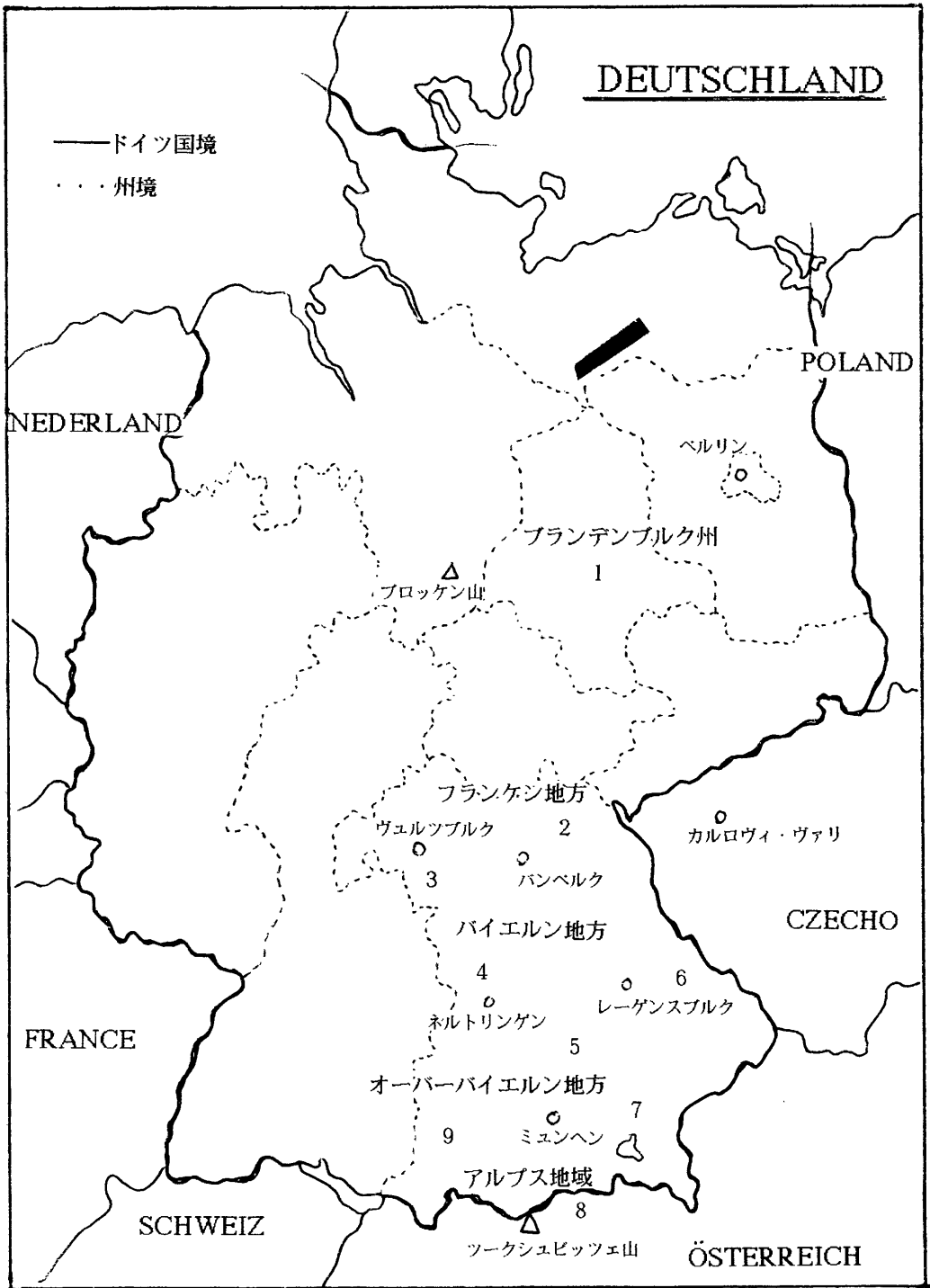
15世紀から16世紀初頭にかけて、ビルトシュトックは完全に市民権を与えられるようになった。宗教改革はビルトシュトックのますますの発展を促したが、プロテスタントの国々においては、ビルトシュトックを断ち切ってしまったが、もう一方、カトリックの管区においてビルトシュトックは、教会の修復の時代に全盛期を迎えていったのである。これは19世紀の終わりまで、続いた。ビルトシュトックは数多く建造されているが、個人によって建てられたものや、教会の共同体(組合教会)や非教会の共同体(市町村民)によって建てられたものなど様々であるためか、いまだ目録(リスト)は存在していないので、把握しにくい面が多い。

III. ビルトシュトック調査活動[地図1]

前回のオーストリアの調査に引き続き、今回はドイツのバイエルン・フランケン地方を中心に、旧東ドイツの一部にも調査を広げた。

1. ベルリンを含むブランデンブルク州付近

ベルリンをスタートして、郊外を調査したが、ビルトシュトックを確認できず、西に大きく移動して、ブロッケン現象で名高いブロッケン山(1142m)のあるハルツ山地を調査対象とし、詳細に山間部を踏査する。だがこの地域にはビルトシュトックは見当たらない。さらに大きく移動して、チェコと国境を接するエルツ山脈を、チェ



〔地 図 1〕

コとの境界線に沿って、東から西へと調査を進めたが、この地域にもビルトシュトックは確認することはできなかった。

チェコへ入国して、ドイツと国境を接するボヘミア地域の一部を調査、残念ながらこの地域にもビルトシュトックは見当たらない。

2. フランケン地方

次に、フランケン地方のレグニッツ河畔にあるバンベルクへと調査を進めた。期待通り町の入口の河畔に、1501年の年号も明確に確認できる高さ3mほどの三面にレリーフを施した石造の仮称・灯籠型〔写真2〕を発見。これが今回の調査でのビルトシュトック第1号となった。バンベルクは第二次世界大戦の戦禍をまぬがれ、世界遺産にも登録されている。町の家々の壁龕にはマリア像や聖人像。橋の上には巨大なキリスト像などを見ることができ、信仰の篤さがうかがえる。また、町の随所に石造のビルトシュトックを確認〔写真3〕。

3. 北部バイエルン地方

調査範囲をバンベルクから、北へ約30km、東へ約70kmのヴェルツブルク周辺までを踏査する。特にシュパンフルトに向かうルート303沿線の集落（ヴァイアー



写真3 バンベルク 灯籠型



写真2 バンベルク 灯籠型



写真4 ヴァイアール 灯籠型



写真5 ベルガーハインフェルト 祠型

ル、マルクトシュテイン)には、時代を感じる石造の灯籠型のビルトシュトックを多数確認できた[写真4]。ベルガーハインフェルトの入口には石造のビルトシュトックがあり、そして家々の壁龕にはマリア像が、あるものは、ガラス張りになっていた[写真5]。

パンベルクを南下してルート470の入口・ヘヒシュタットには、彩色も鮮やかな灯籠型[写真6]や仮称・十字架型など数多く確認された。特に描かれたモチーフに彩色されたものは、今回の調査では初めてである。

4. 中西部バイエルン地方

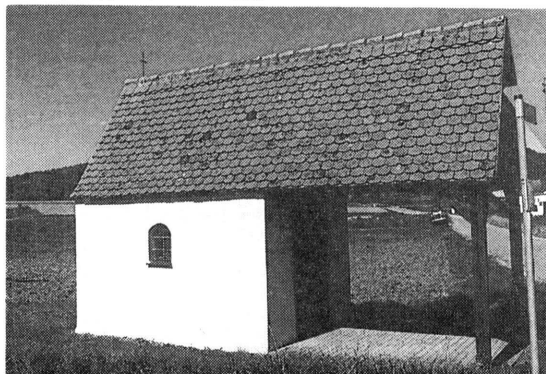


写真7 フレムディングゲン 教会型



写真6 ヘヒシュタット 灯籠型

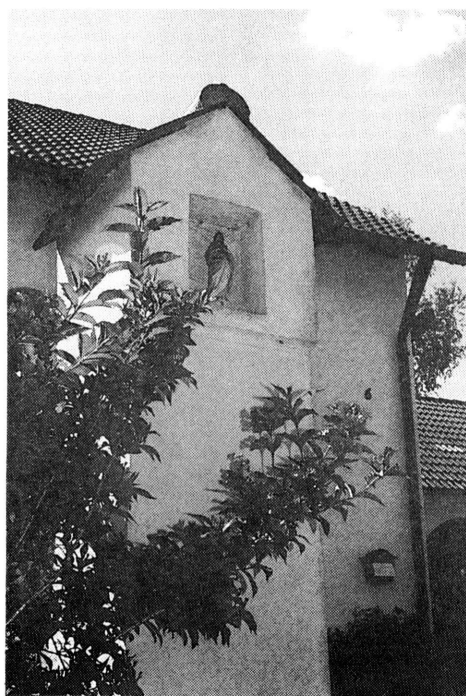


写真8 マルクトオフィンゲン 巣箱型



写真9 ヴァラーシュタイン 石柱型



写真10 ハインスファルト 巣箱型

さらに、大きく移動して、ロマンチック街道と呼ばれるルート25のネルトリンゲンの周辺の村々の出入口には、沢山のビルトシュトックが確認された。

その一つ、フレムディンゲン村の入口には、小さな教会と見紛うばかりの建造1814年とあるビルトシュトック[写真7]に出会う。地元の人々に確認したが、小さな教会ではなく仮称・教会型の「ビルトシュトック」とのことである。マルクトオフィンゲンには仮称・巣箱型のマリア像[写真8]を確認。ヴェンゲンハウゼンの石

造の大きなキリスト像は、年号は新しく1950年とあった。ロマンチック街道のヴァラーシュタインに立つ、三位一体とペストの記念柱もビルトシュトックの一種である[写真9]。ハインスファルトの巨大な三基の巣箱型[写真10]は、ルート466との分岐に確認できたが、修復中のため内部の像は外されていた。

5. 中部バイエルン地方

レーゲンスブルクを目指し、東に大移動しながら調査を続ける。ムニンゲンの四つ角には、木製の十字架型、彩色されたキリスト像の足元に、柱をくりぬきマリア像が収められている[写真11]。また、集落の出口の十字架型は、屋根の上に鶏が飾りに付いている(ペテロの雄鶏)。

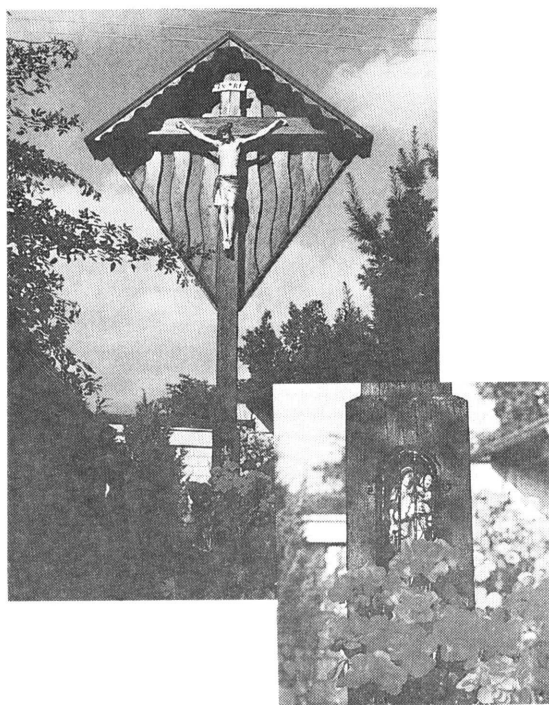


写真11 ムニンゲン 十字架型

マールブルクの入口には、レンガ造りの祠型。ルート16に道をとって、オーバーハウゼンの出入口に、木製の十字架型。これら十字架型は、いずれも建設年号が1970年代と新しい。これらは木製なので、それぞれ作り替えられているのであろう。インゴルシュタット郊外のルート16沿には祠型、大きな教会型も確認された。さらに、東へ進みネティンクにも大きな教会型。ホップ畑の実るガイセンフェルトやアイグルスパッハには、大きな木製の十字架型が分岐の随所に確認された。

6. 中東部バイエルン地方

レーゲンスブルクには、「説教の記念柱」[写真1]として名高く、何段にも別れた巧妙なレリーフが四面に施された初期のビルトシュトックを、町の西側の入口、ヤコブ門の近くに確認。高さは6 m以上もありすばらしいものである。中央駅前の公園内には、二か所に、同様の巨大な石柱[写真12]を確認できたが、風雪にさらされ破損がはげしい。一基は頭部と側面が欠落していた。これより南にコースをとり、ルート15を南下、オーパートラウブリングの交差点に、立派な石の基壇の上に建つ十字架型[写真13]。集落の出口にある赤いバラの花に囲まれた、金色に輝くキリスト像とマリア像[写真14]が印象的であった。ケーフェリングとブーフハウゼンの出入り口にも十字架型のものを確認。ベルクハウゼンの分岐には、木製の十字架に、ブリキに彩色したキリスト像・マリア像を取りつけたビルトシュトックもあった。ノイファーレンとエルゴルトスバッハにも十字架型のものを確認。ウンターウンスバッハの入口には、納屋の壁面に十字架型[写真15]が固定されていた。エッセンバッハの十字架型は屋根の部分ブリキ製でキリスト像・マリア像は鋳物製であった。さらに、南下してクムハウゼ



写真13 オーパートラウブリング 十字架型

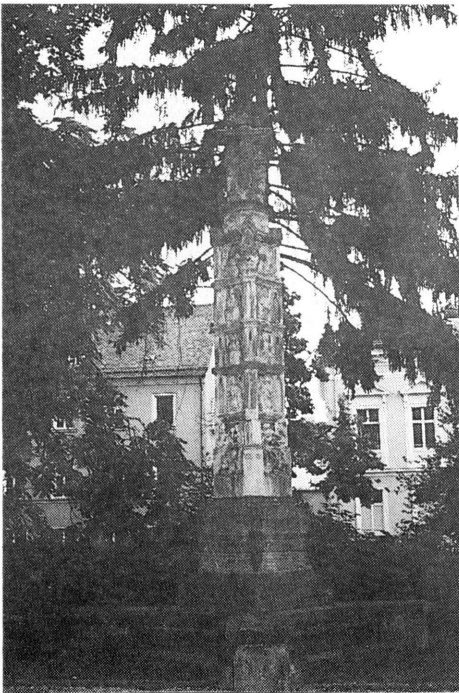


写真12 レーゲンスブルク駅前公園内 石柱型



写真14 オーパートラウブリング 十字架型

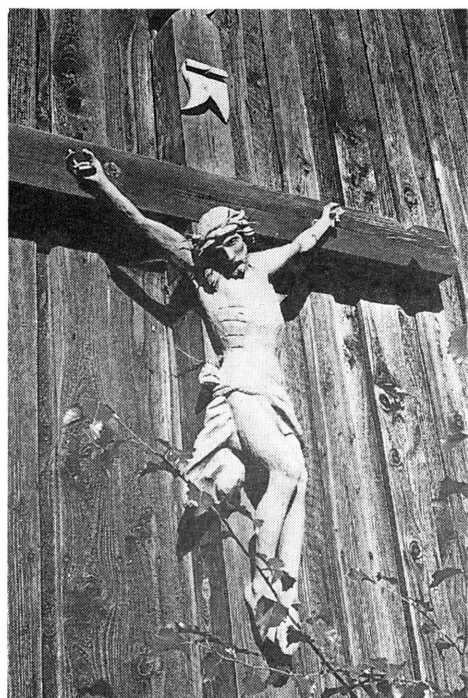


写真15 ウンターウンスバッハ 十字架型

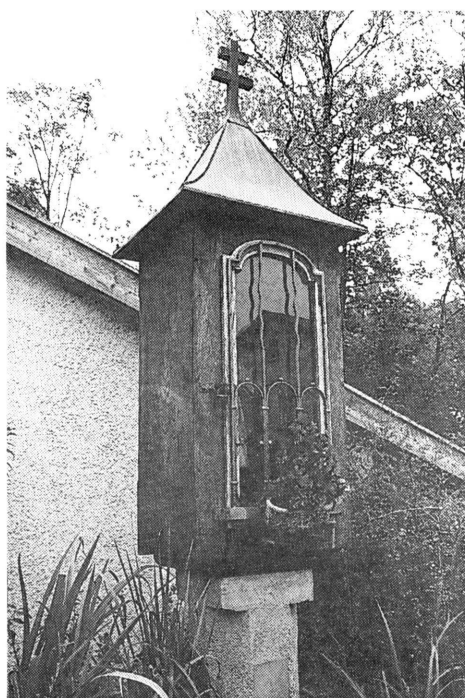


写真17 タウフキルヘン 巣箱型

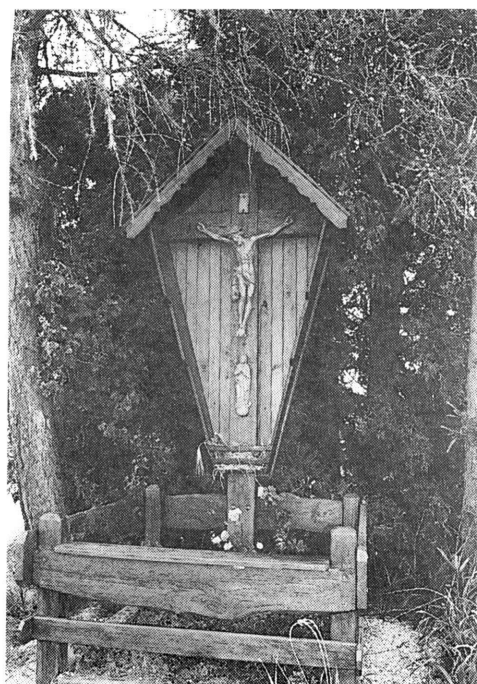


写真 16 ラオスバッハ 十字架型



写真18 ブリン 祠 型

ンの四つ辻にも十字架型のものを確認。ラオスパッハの交差点脇には、大きな十字架型〔写真16〕がこんもりとした木々に囲まれて鎮座していた。タウフキルヘンの町中の橋の袂には、細長いガラス張りの巣箱型〔写真17〕。

7. 東部オーバーバイエルン地方

ドルフエン、セント・ボルフガング、モース、ゾーエンなどの集落にも十字架型が見られる。この辺り来ると、オーストリアとの国境線となるアルプスの連山が、夏空にくっきりと姿を現わす。キームゼーの周辺にも十字架型が目立つ。湖畔の一番大きな集落・プリンの入口には、大きな祠型〔写真18〕を確認。

8. 中部オーバーバイエルン地方（アルプス地域）

西に大きく移動して、温泉保養地として名高いバード・テルツにも十字架型の大きなビルトシュトックが確認できた。外壁に様々のフレスコ画が美しい山里、オーバーアマガウは木彫り町である。家々の軒にはキリスト像やマリア像、村の分岐には、美しく彩色されたマリア像を収めた祠型〔写真19〕のビルトシュトック。農家の垣根の一角にも小さな祠型〔写真20〕。村の随所に、立派な木彫りのキリスト像を収めた十字架型が目にとまる〔写真21〕。

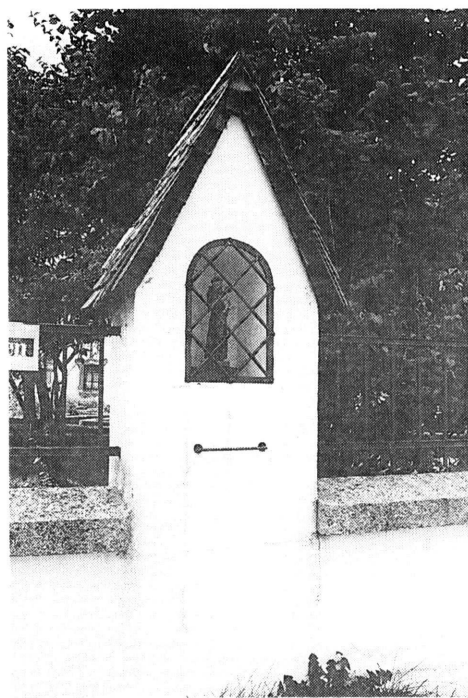


写真20 オーバーアマガウ 農家の垣根 祠型

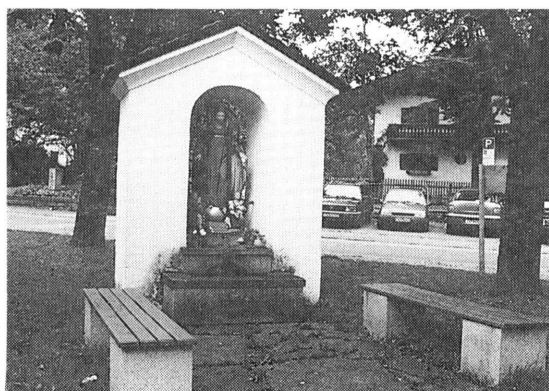


写真19 オーバーアマガウ 祠型

9. 西部オーバーバイエルン地方（アルプス地域）

何のチェックもない国境を越えて、ドイツの最高峰2962mのツークシュピッツェのオーストリア側の麓のリエーアバルトにも十字架型。そしてレアムースの橋の袂にも聖人像を収めた祠型〔写真22〕を確認。村の中には可愛らしい教会型〔写真23〕。また村のはずれの丘の上には、たくさんの灯籠型を従えた六角形の教会型〔写真24〕がそびえていた。ネーゼルヴェンゲル、ハラー、ハルデンゼー、ツェープレンなどの集落には、十字架型と

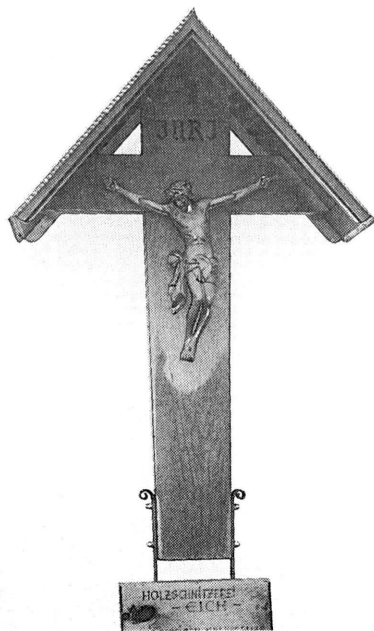


写真21 オーバーアマガウ 十字架型



写真22 レアムース 橋の袂 祠 型

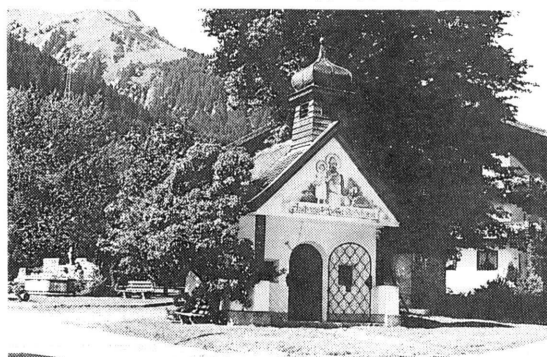


写真23 レアムース 教会型

教会型が確認された。ドイツの中に盲腸のように飛び出した木彫りの里、ユングホルツ（若い木）村には、名に違え、屋根のない簡素な金属製の十字架型のみであったのは以外であった。

今回の調査はベルリンから始まり、ハルツ山地、ホルツ山脈、チェコ、フランケン地方、バイエルン地方、アルプス（オーストリアの一部を含む）地方におよんだ。

IV. ビルトシュトックの型

今回のビルトシュトックの調査により、さまざまな型のビルトシュトックに出会った。それらが多く建造された時代や地域性を明確にするために、大きくいくつかに分類することを試みた。

A. 仮称・石柱型

本来的な意味での、ビルトシュトックで、ゴシック様式をとっている。最も多く広められた型である。

土台の上に断面が長方形や、正方形・八角形・円形などの柱身が立つ。そこには装飾が施され、レリーフの形

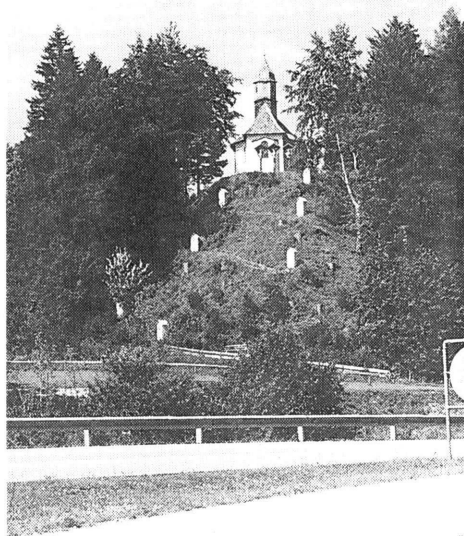


写真24 レアムース 町はずれの丘の上
灯籠型を従えた教会型

式をもっているものがある。その上に小尖塔や礼拝堂、聖櫃あるいは灯明台に似た形のものを頂部に飾っている。ときには、その上に屋根をつけたものもある。特に記念柱に属するものは、ほとんどバロック調であり、法外の高さとしさを誇る。

B. 仮称・灯籠型

細い柱身の頂部に飾りがある型をいう。平坦な形をした飾りは、前面のみのレリーフから、箱形四面すべてに、レリーフや彫刻を施したものまである。材質は主に石製である。今回フランケン地方で見ることができた型である。

C. 仮称・果箱型

チロル地方に多く見られるが、柱身の頂部に大きめの果箱のような、箱状のものが取り付けられている型である。各面に窪みがあり、そこに聖書の物語などが描写されている。中世以降、頭部の飾りは壁龕に近くなり、立像や群像が収められるようになった。柱の太さや頂部の大きさによりB. 灯籠型と、C. 果箱型の区別しにくいところもある。

D. 仮称・十字架型

キリストの磔形像をあらわしたもので、現在では一般

的である。十字架には、ほとんど屋根がつけられており、その屋根は切妻形で、木製やブリキ製などさまざまである。十字架の背面の形は、デザイン化された逆三角形の木製のものが多い。そしてキリスト像、その下部に取りつけられたマリア像は、木製の丸彫り、ブロンズ製、ブロンズの半面像、ブリキ製など、また彩色されたものもある。

E. 仮称・祠型(大きなものを教会型とする)

初期のものは「聖なる小屋」といわれ、小さな小屋の中に祭壇が設けられ、壁面にはしばしば壁龕も施されている。そこに格子がはめられているものが多い。内部には、彩色豊かに彫刻されたマリア像や聖人像が収められている。この形は13世紀初頭から19世紀までたくさん造られた。それらはしばしば、聖地巡礼の道のそばにあり、野外の小礼拝堂に近い役割を持っているようである。

祠型の大きなもので、仮称・教会型といわれるものはフランケン地方やバイエルン地方、特にアルプス地域に数多く確認することができた。礼拝堂を建設する力のない、ほんの数戸の小事の人々が、礼拝堂に代わるべきものとして造りあげたとも考えられる。

V. まとめ

宗教とは日常化された面と非日常的な面とがある。我々は、常識的に宗教は神社や寺院、教会にあると思いがちであるが、これは生きた宗教を固定化、形式化したもので非日常的といえる。固定化した宗教を甦らせるためには、生活に密着した実践的な面が必要になってくる。毎日ドイツの各地で数多く(約100カ所)ビルトシュトックに接し、これが日常生活に密着していることを実感したのである。

ビルトシュトックは、純粋にキリスト教を基盤に成り立っているためか、緻密さが感じられる。時代とともにさまざまに習合と変化を繰り返し、複雑化している面もあるが、地域の実情に応じながら、生活の中に深く根づいているのである。

ビルトシュトックが設置されている場所は、橋の袂、都市の城門、教会の農地の境界、巡礼のための礼拝堂への道、街道の十字路、集落の出入口などである。これらのビルトシュトックは、宗教的意義の表現であるが、もう一方には、人々が集落をつくり、社会を形成していった時から、その集落の中に悪霊や災難が入り込んで来るのを防ぎ、それぞれの安全を祈願するための信仰だとも考えるのである。

今回の調査の結果、民間信仰の対象物であるビルトシュ

トックが生き続けているのはカトリックの強い地域といえる。カトリックは、一神教といっても聖母マリア信仰、聖人崇拜など、多分に多神教的であり、呪術的であり、儀式を重視するなど、むしろ習合性の濃い宗教といえる。各地で出会ったビルトシュトックは、聖人像やマリア像を収めた祠型や、キリストの磔形の柱の下部にマリア像を伴って、祀られている形にたくさん遭遇し、マリア信仰や聖人崇拜の強さを感じるのである。

ビルトシュトックは、ザクセンアンハルト・チュウリンゲン地方には見当たらなかった。バンベルク・バイロイト、コーブルクなどを含むフランケン地方には、時代を感じる石造の灯籠型や巨大な記念柱などが多く見られた。バイエルンの中部地域には、十字架型を中心に、灯籠型・祠型などと多種多様なビルトシュトックが確認できた。アルプス地域は、教会型と十字架型が数多く確認できた。

39集において、ビルトシュトックとケルト十字の関連について触れたが、残念ながら学術的に立証されていない。しかしながら、古代ケルト人は、石に深い信仰心を抱いていた。キリスト教以前のケルトの人々は、石材や木材を使って、大きな柱状の彫像を造り、聖域や墓所に設置した。キリスト教が伝えられた後も、これらの彫像の上に十字を刻み込むことで、キリスト教の道具立ての一つとして継承されたのであろう。ビルトシュトックの起源とも言うべき「石製の十字架」(Steinkreuzen)にケルト文化を感じ、ヨーロッパ文化の底辺には、ケルト文化が脈々と生き続けていると思えるのである。民間信仰は、その時代時代によって、その姿形は変わりながら、また、人々の祈願する内容も変わりながらも現代に生き続け、庶民の心の平安を支えている。

謝 辞

資料の翻訳にご協力ご指導下さいました井上美佐子氏、資料収集にご協力下さいました東京ドイツ文化センター・図書館担当遠藤佳世氏のご両名に深く感謝申し上げます。

注

- 1) Reallexikon Zur Deutschen Kunst Geschichte
p. 695より引用

参考文献

1. Reallexikon Zur Deutschen Kunst Geschichte
2. Bildstocke in Wien